

明和町と万葉集

『万葉集』は古代の和歌が集められた日本最古の歌集で、8世紀後半頃にまとめられました。万葉集の中には、実在が確認できる最初の斎王である大来皇女の歌も紹介されています。

大来皇女

天武天皇の娘で、壬申の乱（673年）の翌年に斎王に選ばれました。

万葉集には、斎宮にいる彼女のもとに、天武天皇の有力な後継者候補であった弟の大津皇子がひそかに訪れた時の歌や、大津皇子が謀反の罪により亡くなったことを悲しむ歌などが紹介されています。

大来皇女は、天武天皇が亡くなったことにより斎王を退きます。父も最愛の弟もいない飛鳥に戻り、家族を想い静かな余生を過ごしたのかもしれませんが。

名張市の夏見廃寺（国史跡）は、大来皇女の発願で建てられた昌福寺だとする説が有力です。明和町だけでなく、三重県は大来皇女と関係が深い地といえます。



『万葉集』巻二には、大来皇女が弟大津皇子を偲んで詠んだ歌6首が載せられています。

大津皇子、竊に、伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯（大来）皇女の御歌二首
（大津皇子がひそかに伊勢神宮に向かい、都へ帰る時に、大来皇女が作った歌2首）

- ・ わが背子を大和へ遣ると さ夜ふけて 曉露に 我が立ち濡れし（105）
（大和へ帰っていく大切なあなたを、私は立ちつくし朝露に濡れています。）
- ・ 二人行けど 行き過ぎがたき 秋山を いかにか君が ひとり越ゆらむ（106）
（二人で行くにも大変な寂しい秋山を、どんな気持ちであなたは一人で越えているのでしょうか。）

大津皇子、薨りましし後、大来皇女、伊勢の齋宮より京に上る時の御歌二首

(大津皇子が亡くなった後に、大来皇女が伊勢の齋宮から上京した時に作られた歌2首)

- ・ 神風の 伊勢の国にも あらしを なにしか来けむ 君もあらなくに (163)

(伊勢の国にいればよかったのに、どうして帰ってきてしまったのでしょうか。あなたはもういないのに。)

- ・ 見まく欲り 我がする君も あらなくに なにしか来けむ 馬疲るるに (164)

(会いたいと切に思うあなたはいないのに、何をしに来たのだろう、ただ馬が疲れるだけなのに)

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首

(大津皇子の遺体を葛城の二上山に移し埋葬した時に、大来皇女が悲しんで作られた歌2首)

- ・ うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を 弟と我が見む (165)

(この世の人間として生きている私は、明日からは、亡骸が葬られている二上山をわが弟として見ていしましょう。)

- ・ 磯の上に 生ふる馬酔木を手折らめど 見すべき君が ありといはなくに (166)

(岩のほとりに伸びている馬酔木を手折ろうとおもうけれど、見せてあげたいあなたがいるというのではないのに。)